

英国の大学図書館における学習支援空間 - JISC のプロジェクトを中心に -

荻原 義弘

21 世紀に入り、学習環境が変化し、より発展的な学習支援空間の構築が求められている。よりコスト効率の良い空間利用と学習への支援は、学習支援空間のデザインをするうえで重要である。学習支援空間は、仮想的側面と物理的側面を併せ持つが、特に近年、電子出版やオンラインで利用可能な情報の増加に伴い、仮想的空間が重視される一方、学習支援空間における物理的空間のニーズが議論的となっている。

本研究の目的は、英国の大学図書館における学習支援空間の発展について考察し、学習支援空間の発展の要件を明らかにすることである。英国の大学図書館において、学習支援空間を構築する上で、JISC (Joint Information Systems Committee) は大きな役割を果たす。JISC とは情報通信技術の活用による、継続・高等教育機関における学習、教育の促進を目的とした、英国全体の学術情報基盤を支える組織であり、学習支援空間の物理的側面に関しても種々のプロジェクトによって支援を行っている。

JISC が行った学習支援空間の物理的側面に関するプロジェクトは、1)「JISC e スペース研究プロジェクト(JISC eSpace study)」、2)「学習支援空間マネジメントプロジェクト(Managing Learning Spaces)」、3)「JISC 学習支援空間評価プロジェクト(JISC Evaluating Learning Spaces Study)」の 3 つであり、各プロジェクトに関連する報告書を調査対象とした。

「JISC e スペース研究プロジェクト」では、英国の学習支援空間を(1)教育スペース、(2)オープンアクセススペース、(3)社会的スペースの 3 つのスペースに分類し、その特徴について論じている。更に、学習支援空間の構築については、教授法の変化を表す教授法的要因と、学習支援空間の改善を表す運用的要因という、2 つの要因から考えられるとしている。

また、「学習支援空間マネジメントプロジェクト」では、高度技術オープンプラン学習支援空間には、教授法的要因と運用的要因による学習の変化に対し、空間の再構成が可能であることが求められると指摘している。

これらの 3 つのプロジェクトに共通して強調されているのが、空間の構成に柔軟性が不可欠であるということである。ここでいう柔軟性には、教授法の変化に対する柔軟性と、物理的空間の変性という 2 つの側面がある。

JISC の学習支援プロジェクトでは、学習支援空間は、空間構築から問題解決までのサイクル及び継続的な評価を繰り返すことが重要とされており、空間構築においては教授法的要因と運用的要因を意識することが重要とされる。また、サイクル内のすべての段階において、柔軟性を重視している。

(指導教員 呑海沙織)